

本書の内容について

不二一元論を唱えたシャンカラは、決して学僧ではなく、当時衰退しつつあったサナータナ・ダルマ（永遠の宗教）を復活させる為、使命を受けて地上に降り立ったアヴァターラ（主の化身）であった。南インドに生まれるや、彼は八歳の若さにして出家僧となり、師であるゴーヴィンダ・バガヴァトパーダのもとで学び、その後、ヴェーダーンタを学ぶ人々のために、ウパニシャッド、バガヴァット・ギーター、及びブラフマ・スートラの各解説書を著し、さらには、ウパデーシャ・サハスリーと呼ばれる一連の文献を残した。また神々を崇める人々の為には多くの讚美歌を奏上し、一般人に向けては、ウパニシャッドの精髓とされる、この、ヴィヴェカ・チューダーマニ（識別の宝玉）を書き上げ、その中に自らの理解のすべてを注ぎ込んだ。それゆえこの書物はシャンカラの思想の集大成と見なされており、そこに輝く美しい詩句は、過去一千年以上もの間、一般人のみならず、聖者と呼ばれる方々をさえ魅了して、ジュニャーナ・ヨーガを説いたラマナ・マハルシも、自らの手でサンスクリット語原典からタミル語へ翻訳したほどである。

シャンカラの著作に関しては、その真贋がしばしば議論されるが、それらの論点の多くは言葉遣いと思想内容の違いを指摘している。しかしながら、ここで留意すべきは、シャンカラは単なる思想家ではなく、インドの地に生まれた大聖者であり、かつ優れた詩人だという事実である。ブラフマンは智慧の大宝殿であり、聖者はそのブラフマンに通じているゆえ、そこから自由に言葉を引き出すことができる。そのような方ならば、ウパニシャッドを専門的に学ぶ者と一般人に向けてでは、語る内容が異なるのは当然のことであり、また詩の技巧上、文脈に合わせて言葉遣いを変えることも、言葉を受取る者ならば、極めて自然の行為だろう。

一般にシャンカラは、世界はマヤー（幻影）に過ぎないと唱え、あらゆる行為を否定して、俗世間を放棄することを促したとされるが、そのような理解は、詩句の意味を正確にとらえていない結果である。インド亜大陸に脈々と流れる思想を理解するには、その根源に位置するバガヴァット・ギーターを学ばねばならず、この聖なる書物を理解せずして、ウパニシャッドなどの文献を理解することは不可能と思われる。

シャンカラの思想は難解とされるが、知的思索だけに頼ることなく、自らの内を静観することで、それは容易に理解が可能となる。なぜならアートマンとは我々自身のことには他ならず、それゆえ自らの内を見極めることで、主の大光明であるブラフマンも理解されるからだ。ブラフマンの本質は「如何なる言葉や心でも捉えられない（詩句469）」もので、それは「聞き語りをするだけの者には（詩句356）」理解することはできない。なぜなら心も理性（知性）も「プラクリティの変化したもの（詩句185）」に過ぎず、それらでは「始まりなき無明という闇を破壊（詩句366）」することはできないからだ。ブラフマンを理解するには「無数の善行（詩句425）」を為さねばならず、さらに「滅ぶべき定めにあるものから、きっぱりと心を離し（詩句69）」て、「感官の対象への欲望を断ち切り（詩句377）」、「ブラフマンに確固として心を定めて（詩句378）」、「内に存在する、そのアートマンを静観（詩句412）」すべきなのだ。

心の重要性（詩句 169～詩句 183）

★ 心の重要性

人間にとって心は最も重要で、心を全くとらえてこそ、解脱は手の届くところである。だが心は知覚器と深く結び付き、またアサーイの力は大なので、それは非常に困難なことである。心の働きを鎮めるには、主の助力がなければ、自分自身で力では不可能である。

一八九 心を離せば、無明は存在せず。

心そのものが無明であり、この世に生まれるという輪の要因なのだ。心が滅するならば、すべてが消えていく。

心が目覚めたなら、すべてが現れるだろう。

詩句 169 (183) ★ 心を離せば、無明(アウディヤ)は存在せず。心そのものが無明であり、この世に生まれるという輪の要因なのだ。解脱は手の届くところである。だが心は知覚器と深く結び付き、またアサーイの力は大なので、それは非常に困難なことである。心の働きを鎮めるには、主の助力がなければ、自分自身で力では不可能である。